

コンテイナー表現の解釈

..その指示性、了解要素、依存性を中心に..

福 安 勝 則

1. はじめに

人の作り出したもの（人工物）の中で、人間に身近で、その歴史も長く、機能も明確なもののひとつに容器がある。この容器をとりまく言語表現は豊かで様々な特徴をもっている。拙論（2007）において、筆者は容器名詞をともなう複合名詞の構成要素に対して、名詞句内ではあるがその複合名詞の外から形容詞による修飾が可能であり、Di Sciullo and Williams (1987)の提唱する単語のアトミシティーの原則を破っているものが存在することを指摘し、英語の複合語にはより広範な分析が必要であることを論じた。

本稿では、*-ful* 名詞のコンテイナー性について、指示性、了解要素、依存性の観点から考察する。人の容器に対する見方、把握の仕方が言語に反映されているという仮定のもとに考察を進めていきたい。まず、*-ful* 名詞の数の一致現象、意味選択の現状を例文とともに概観する。一見した数の不一致現象、入れ物の状況への参与者としての解釈の可能な場合の条件、及びその解釈の生まれる理由について論じる。意味選択的に了解される要素の例外的な用法、さらに、他の入れ物をともなう構文についても説明が適用できることを示す。（なお、本稿では、容器、入れ物、コンテイナーという用語を特に区別せずに用いる。）

2. 数の一致

Akmajian and Lehrer (1978)は、*a family of...*, *a bottle of ...*のような表現を含む名詞句の主要部を決定する際に、数の一致、付加疑問文における一致、選択制限を用いている。

(1)a. *A family of skunks* was spotted yesterday.

b. *A family of skunks* live in my backyard.

(2)a. *A bottle of wine* spilled.

b. *A bottle of wine* broke.

..Akmajian and Lehrer (1976: 405-406)

(1)では、数の一致している斜体字部分が、そして、(2)では意味選択が一致している斜体字部分が、当該の名詞句の主要部であるという。

このことを踏まえ、*-ful* 名詞を含む名詞句の主要部について、実例をもとに考察してみよう。*-ful* 名詞が複数形でそれに後続する名詞が複数形の場合は数の観点から区別が付きにくい、*-ful* 名詞が単数のときは後続名詞が複数（加算名詞）の場合、*-ful* 名詞が複数のときは後続名詞が（物質名詞などの）単数形の例を見ることにする。

2.1. 複数・ful 名詞 + of + 単数名詞の場合

次の例は、動詞が複数形の spoonfuls に数の一致を示す文を含んでいる。

- (3) Which of the cups is sweeter, or is the sweetness in both cups the same? To cup A two spoonfuls of sugar were added and to cup B one spoonful of sugar was added.

第4節でも考察するように、この場合、コップAに加えられる砂糖に関して、スプーンを用いて加えられる2回の動作を読み取ることができる。2回の動作か、1回の動作によるのか砂糖の量、そして甘さを決めていると言える。次の場合と比較してみよう。

- (4) "Only two spoonfuls of sugar makes the medicine...go down..." --*Mary Poppins*

この例では、sugarの方に動詞の数が一致しているので、砂糖の方が主要部ということになる。ここでは、動作の回数ではなく、砂糖の量が問題となっている状況が理解される。(分数が複数であるが、動詞が単数である次の例を参照。Three fourths of the liquid is absorbed.)

2.2. 単数・ful 名詞 + of + 複数名詞の場合

次の例は potatoes を再起代名詞 themselves が先行詞としている。その点では、potatoesの方が主要部であるということになる。

- (5) Then Lord Austin made a bucketful of potatoes to dump themselves on top of the principal's head and he lays unconscious on the floor as the ...
--*Ultimatebb*

ひとつの塊と見るならば次のように単数扱いとなるのであろう。

- (6) And there was a bucketful of potatoes in the corner. "From your garden, Auntie? I said indicating the vegetables. "Good year for spuds, eh?" Art commented, examining a knobby red specimen about the size of a squash. ...
--*Aunt Annie's Doorbell*

数量で記述されたものの方を主要とみるのか、量を決定するコンテイナーの方を主要とみるのかは、様々な要因がかかわっており、単なる数の一致だけで決めることもできないと思われる。

この点について・ful 名詞が「部分詞」として機能している場合を考察しておきたい。

3. 数量詞性と＜コンテイナー性＞

数の一致に注目して次例を考察してみよう。

- (7) Only a handful were asked of those questions concerning electromagnetism.

一見すると(7)の a handful と were は数の不一致を示しているように見える。ただ、この文が次(8)のような文から、いわゆる前置詞句外置操作 (PP Extraposition) により of 以下の部分が文末に移動されて派生されたと考えれば、ある程度の説明がつくかもしれない。

- (8) Only a handful of those questions concerning electromagnetism were asked.

(部分詞表現)

つまり、この文の複数形の動詞 were は複数形の those questions に一致しているとみれば、一見するすると、前述の Akmajian and Lehrer (1976)の主要部の定義からこの主語の主要部は those questions concerning electromagnetism となりそうである。しかし、実はそうではない。Selkirk (1977)は、この文は次のような擬似部分詞 (pseudo partitive) の表現とは異なるとしている。

- (9) Only a handful of questions concerning electromagnetism were asked.

(擬似部分詞表現)

- (10) *Only a handful were asked of questions concerning electromagnetism.

…以上 4 例、Selkirk (1977: 304)

例文(9)における擬似部分詞の場合は、(10)の非文法性が示すように、of questions concerning electromagnetism を文末に移動することはできないことがわかる。後でみるように(8)と(9)の間の構造の違いも示唆されるが、意味の違いも存在する。この意味の違いは、日本語の例で考えることもできる。

- (11)a. 検査のため米の一握りをもってきた。
 b. 検査のためその米の一握りをもってきた。
 (12)a. 香川県からミカンの一箱が届いた。
 b. 香川県からあのミカンの一箱が届いた。

それぞれの(a)の文が擬似部分詞表現を含み、(b)の文が部分詞表現を含む。つまり、(11a)と異なり、(11b)では、一握りの米とともにその出所である米 (の集合体) も存在する解釈がある。(12b)についても、届いた一箱のミカンに加えて、例えば、香川で見た集荷され山状に積み上げられたミカンも存在している解釈がある。

また、Selkirk は、関係代名詞の先行詞のとりかたの違いから、部分詞表現、擬似部分詞表現の興味深い違いを説明している。

- (13)a. She bought him a number of those daffodils, only two of which were faded.

- b. She bought him a number of daffodils, only two of which were faded.

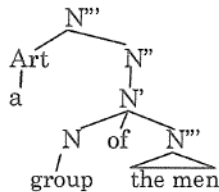
--Selkirk (1977)

両方の文は良く似ているが、部分詞を含む(13a)では、彼女が彼に買ってあげた水仙は色あせていなかった可能性があるのに対して、擬似部分詞を含む(13b)では、彼女が彼に買ってあげた水仙の2本は色あせていたという解釈が得られる。

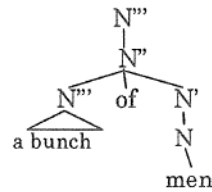
英語では、those、日本語では、「この」や「あの」などの定表現が部分詞表現には含まれていることがわかる。

Selkirk (1977)は、部分詞と擬似部分詞の統語構造における違いを次のようなものであると仮定している。(14a)が部分詞構造、(14b)が擬似部分詞に相当する構造である。

(14) a.



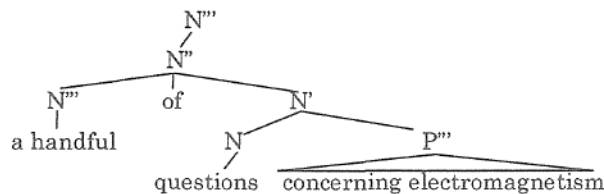
(14)b.



そして、handful を含む次の(15)の擬似部分詞表現の構造は(16)のようなものであるとしている。(of) questions concerning electromagnetism の文末への移動は、(10)で見たように、Xバー理論でいうところの X'からの抜き出しではないので許容されないが、concerning electromagnetism の文末への移動は X'からの抜き出しであるので、(17)が示すとおり許容される。

- (15) a handful of questions concerning electromagnetism

(16)



- (17) Only a handful of questions were asked concerning electromagnetism.

これに対して、(7)における部分詞構造は of 以下が N'の構成要素であるので、文末への移動が許容される。X'の補助部は外置操作を許容するということは、多くの文献で指摘されてきている(例えば、分かりやすい例では、Radford (1988)の a student of Physics と a student with long hair の対比を参照。)

部分を表す part of ...表現は Jackedoff (1977)では、of 以下を partの補助部とし、partを主要部としている点、また、上でみてきたように、(8)の handful は外置操作を許容している点か

ら、(7), (8)の handful は部分詞表現の主要部であるということが強く示唆される。したがって、本節で最初にあげた例文(7)の形は単数である主語 handful が動詞の複数形 were をとっているということは、数の一致という観点から考えて何を物語っているのか、という問いが生じる。それは、例えば、名詞 family が単数形でも動詞が複数をとる用法を思い起こさせる。つまり、複数の構成員をとるような集まりを示すということである。〈入れ物〉に入れられる複数のものは入れ物によってまとめられる。このまとまりを a handful と括っていると考えることができる。これは、handful の hand がもつコンテナー性の現れであると仮定して考えるならば説明できるといえる。

なお、次の例の spoonfuls の例においても handful の例と同様に、of 前置詞句の主語からの文末への移動（前置詞句の外置操作）に関して、部分詞表現と擬似部分詞表現の差が生じることを記しておきたい。

- (18)a Six equal sized spoonfuls of the natural sugar form Cuba were used.
- b. Six equal sized spoonfuls were used of the natural sugar form Cuba.
- (19)a. Six equal sized spoonfuls of natural sugar form Cuba were used.
- b. *Six equal sized spoonfuls were used of natural sugar form Cuba.

4. 了解される容器と意味選択

英語の・ful 複合名詞（spoonful, capful 等）を詳細に調べていくと、量を表す機能のほかに、・ful 複合名詞を構成している容器名詞が示す〈入れ物〉の存在を強く含意する例に出くわす。まず、次の例を見てみよう。

- (20)a. The mosaic of x-ray photographs, with circular fields of view, reveals only a small handful of sources. Some of the sources are x-ray binaries, a special type of binary star system, in which one of the members is a neutron star. ...
--Cosmic Classroom
- b. I just heated the shredded chicken with some chicken stock, then added some cheese tortellini. I cooked them through, then added a big old handful of fresh spinach leaves. Delish! And really, humiliatingly easy. Not even a recipe. ...
--Food and Drink

(20a)では handful は量を表しており、実際の「手」のかかわりを想起することはないであろうが、(20b)においては量の解釈に加えてほうれん草を手で掴んで入れたことを読み取ることができる。

脈絡において、このような差が生じうることを念頭において次の例を考察してみよう。

- (21)a. The woman is peeling a basketful of potatoes.

- b. There was a bucketful of potatoes in the corner.

英語のインフォーマントチェックによれば、(21a)で記述される状況において、籠 (basket) が状況に参加するものとはならないが、(21b)により記述される状況においては、バケツ或いは手桶 (bucket) はより想起されやすいという。

さらに興味深いのは、次のような例により記述される状況における spoon、bucket の状況参加の程度である。

- (22) He scooped two spoonfuls of sugar up and poured it into his coffee. Picking up another nearby spoon, Elian began stirring the contents. --*Strabal, Road 1*
 (23) Mandine grabbed a heavy bucketful of water—the servants always made sure she had a fresh supply—and dumped it over her head... --*Mandine 728, Chapter One*

(22)においては、砂糖をいれるのに実際にスプーンが2度用いられ、スプーンがあたかも指示物として存在しているかのような解釈が強く得られる。また、文中の another nearby spoon の another がスプーンの使用を前提としていることから、spoonful をとる前文が spoon を状況の参加者としていることが強く示唆される。

例(23)の最初の文で記述される状況においては、あたかも、「掴む (grab)」の対象としてバケツ (bucket) が存在しているかのようなものである。文法上においても、a heavy bucketful of water が動詞 grab の目的語になっており、文字通りであれば、量、或いは水を掴むことになり変則的なことになり興味深い。これは、bucketful の中の bucket が意味的にバケツを指し示しているかのようになっている。いずれにせよ、-ful 名詞表現で記述される状況に、<入れ物>が解釈上必須である点が重要である。そのような現象が起こりうるのは何故であるのか。

この問題を考えるために、容器のもつ意味的固有の特徴を容器と内容物との関係として、人がどのように容器を把握するのかという観点から考察する。容器に入ったものは容器に入っているその時点における固有性をもつと仮定してみよう。言い換えれば、内容物はその場所空間にある時点時点のもの、という把握の仕方が人間に存在すると仮定する。場所空間が物を規定するという考え方である。比喩的に述べるならば、研究室にいるときの人間 A と家庭にいる人間 A は異なるという考えにつながる。「その花瓶に生けてある花が気に入ったね。」「この皿で食べる刺身の味は少し違うね。」というような場合も含まれる。

内容物の存在が入れ物に依存するような状況が読み取れるかどうか重要な点となることがわかる。ジャガイモの皮をむく状況に、その量を規定する入れ物は必ずしも必須ではない。その場合、入れ物が手段・道具的に用いられない。しかし、ある量のジャガイモを保存する、或いは置いておく状況であると解釈される場合は、手桶はある量のジャガイモを或る形で維持するのに必要であると解釈される。また、砂糖をすくって、コーヒーまで運んでいく場合は、その砂糖の存在は入れ物であるスプーンに依存している。同様に、水を移動させ、頭からかぶるような状況では、水の存在は入れ物 (例えば、バケツ) に大きく依存する。内容物が流動物であるような場合に入れ物が容易に想起される。

スプーンの例をとって更に考察をすすめるならば、スプーンの上ののっている砂糖（入れ物によって規定される砂糖）は、その状態でスプーンなしでは存在しないと考えることができる。スプーン上のその砂糖を必要としている状況であるので、スプーンも必要とされる状況となる。このことが、記述された状況への参加者の解釈を可能とすると説明することができる。

このような把握の仕方が、さらにすすんで、先の grab の例のように一見すると選択制限を破っているような用法が生じてくると考えるのはさほど不自然なことではない。

ちなみに次のような表現も可能である。

(24) He turned over a basketful of fruit.

日本語でも次の(25a)の表現は容認されるというインフォーマントは多い。

(25)a. 彼女はバケツ(いっぱい)の水を {ひっくり返した/傾けた}。

b. *彼女は小川の水をひっくり返した。

5. 他の<入れ物>表現の説明

内容物は容器により規定される、或るいは、内容物が容器に依存しているという把握の仕方は、他の入れ物にかかわる構文の特徴も説明することができる。

まず、次の例を考察してみよう。

(26) He carried the water from the well in a pail.

この例において道具が場所表現で示されている。(場所表現であるのは何故か、という問題は中右(2004)、福安(2004)を参照されたい。)ここで、取り上げたい問題は、この文で運ぶ(carry)の目的語は水(water)であるのに、手桶(pail)もどこかへ(例えば、台所とか風呂桶まで)運ばれたことが了解されている。しかも水がその桶に入れられて移動することが理解される。桶の水との関係、水が泉からくみ上げられて、例えば台所に入るまで(道中は)桶の中に水が入っていることが了解されるのである。なぜ、このようなことが読み取れるのであろうか。それは、この文で記述される状況で、水の存在は手桶に依存しているので、水を運ぶことは手桶も運ぶことになるからであると説明付けることができる。日本語でも、「料理を皿にいれて出した。」において、同様の解釈を得ることができる。

このような内容物の入れ物への依存性は、表現同士が離れていてもその依存性の読みが理解できる点である。移動のかかわらない例で見てみよう。

(27) Sally has the goldfish in the bowl for sale.

--Cattell (1984: 99)

(28) It's just an excuse used to sell goldfish in a bowl so it doesn't seem like torture.

(29) I have a fish in a jar. I recently acquired a fish in a jar.

Cattell (1984)によると、(27)には2通りの意味がある。ひとつは、金魚だけを売りに出している解釈、もうひとつは金魚とそれが入っている金魚鉢と一緒に売りに出している解釈である。Cattell は別々の構造を提案しているが、意味的な説明は与えていないようである。なぜ、前置詞句の中にある bowl も売りにだされる解釈が存在するのかでここで問われるべき問題である。答えは、やはり、入れ物と内容物の関係で、内容物は入れ物に依存する、或いは内容物は場所空間に規定されるという原則からでてくると思われる。そのような見方においては、金魚鉢の中の金魚はその入れ物を離れた場合とその入れ物にいる場合とは異なることになる。後者の場合の金魚を売るには、入れ物に依存しているため、入れ物も売られなければならないのである。

6. まとめ

最初に、入れ物をその構成要素としてとる・ful 名詞の数の一致現象、意味選択について具体的に概観した。その多様性を認識した上で、・ful 名詞をともなう部分詞表現の表面的な数の不一致は内容物を取り、それを取り纏めるというコンテナ性により説明できることを示した。また、・ful 名詞表現の中の入れ物表現から想起される参与者、そしてその意味的な状況への参与の解釈がどのような場合に成立するかを明らかにした。また、それが生じるのは何故かという問題も、入れ物と内容物の本質的關係、依存関係から説明できることを論じた。そして、その説明は、他の入れ物の関与する構文にみられる了解される関係についても適用可能であることを示した。

参考文献

- Akmajian A. and A. Lehrer (1976) "NP-like Quantifiers and the Problem of Determining the Head of an NP," *Linguistic Analysis* 2, 395-413.
- Aronoff, M. (1983) *Word Formation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Cattell, R. (1984) *Syntax and Semantics* 17, Academic Press, New York.
- Di Sciullo, A. M. and E. Williams (1987) *On the Definition of Word*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 福安勝則 (1995) 『恋と愛からの言語学～言葉の重箱のすみ～』朝日出版社。
- ………… (2004) 「『動いているのか、動いていないのか、それが問題だ。』—英語における道具の<場所>表現と動きの中の不動性について—」『鳥取大学英語研究』第4号, 53-66.
- Fukuyasu, K (2007) "On the Descriptions of the <CONTAINER> in ·ful Nominals in English," *Tsukuba English Studies* 26, 1-12.
- Jackendoff, R. (1977) *X-bar Syntax: a Study of Phrase Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jespersen, O. (1933) *Essentials of English Grammar*, University of Alabama Press, University, Alabama.
- 中右実 (2004) 「言語と認知と文化のインターフェイス—なぜ in a car なのに on a bus なのか

—」筑波大学最終講義.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Radford, A. (1988) *Transformational Grammar*, Cambridge Univ. Press, Cambridge.

Selkirk, E. (1982) "Some Remarks on Noun Phrase Structure," *Formal Syntax*, eds. by P. Culicover, T. Wasow, and A. Akmajian, 285-316, Academic Press, New York.

(2007 年 10 月 15 日受理)

